

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第二回　やまとことのは

南出喜久治（令和6年9月15日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やはよろづへの　くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

祭祀に用ゐる言葉は、やまとことのは（大和言葉）です。ふること（古言）の大和言葉には濁音がなく全て清音です。ふることは、振る言であり、靈振りによる言靈（ことたま）の世界なのです。そして、大和言葉による祝詞や和歌は、固有名詞を用ゐる場合は別として、漢字語や外来語は原則として用ゐません。祭祀を斎行してカミに伝へるのは古代の言葉で行ふことが正確に真意を伝へることができるからです。

真意とは、ことたま（言靈）のことです。言靈とは、言葉に宿る神秘的な神威のことですが、これは、認知科学で論じられてゐる、いはゆる「記号接地問題」と絡んでくるものです。

記号接地問題とは、いまやAI技術による研究が進んでおり、言葉は記号のみとして伝へられるものか、あるいは言葉と身体経験との相互作用によって伝へられるのかといふ問題です。これは、百聞は一見に如かずといふことと関はつてくるものです。

人は、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）の作用によって物を認識し、それを言葉で表現します。因みに、この五感の種類と順序は、般若心経の「眼耳鼻舌身」と同じです。しかし、同じ物を認識しても人によつて、その物の性質を伝へる場合にそれを言ひ表す言葉が異なるとき、受け手としては別の物か同じ物かの区別がつきません。言葉を単なる記号として捉へれば、同一表現でなければ別の物になります。しかし、大和言葉は、記号ではありません。単なる記号であれば言靈は宿らないからです。他国には言靈といふ観念はないために、このやうには理解ができないのですが、異なる記号であつても言靈によつて同じ物と認識できる場合が出てきます。

それゆゑ、言葉は、身体的感覚である五感の作用による身体経験と一体となつて言靈を通じて伝はるものであると考へられます。

そして、さらに、大和言葉には、オノマトペ（擬音語、擬態語、擬情語、擬声語）の音（発音）をも取り込んだ言葉があります。たとへば、古事記の創世神話の中で出てくるオ

ノコロシマにはいろいろな解釈がありますが、これは、オノ（自）づからコロコロ（転ぶの動詞に転用した擬態語）と回るシマ（島）であり、自転島のことです。自転する島宇宙とは地球のことです。古事記の創世神話は、イザナギノミコトとイザナミノミコトの二柱の神々が地球を作り、おおやしま（大八洲）の国生みがなされたといふのは、大和（日本）の成り立ちが地球の成り立ちの雛形になつてゐることを意味してゐるので。

さらに、「やまとことのは」の「は」の「葉」のことで、木の幹から枝が伸びて葉を付けることから、木の幹が本質であり、葉はその現象であるといふ意味ですから、「こと」（言）の「葉」は、本質である「たま」（靈）を反映するものとして、「ことたま」なのです。

それゆゑ、「こと」と「たま」は一体のものとして、祭祀の斎行においては、声を発して言靈の靈振りをしなければならないのです。